

原発の電気が安いというのは本当か？

関電は大飯原発4号炉が再稼働して、燃料代が安くなるとして7月から電気料金を引き下げました。福島原発事故の甚大な被害を目にして、原発再稼働に反対する声が世論調査などで多数を占める中、「やっぱり原発の電気は安いだから再稼働やむなし」という声を引き出したのでしょうか。

折りしも国のほうでは、エネルギー基本計画の3年に一度の改定作業が行われました。今回のエネルギー基本計画では、2030年に向けた基本的な方針と政策、2050年に向けた長期的なシナリオを定められました。多くのおかしいという声を無視して閣議決定された計画では、原発を「低炭素の準国産エネルギー源」「長期的なエネルギー需給構造の安定性に寄与する重要なベースロード電源」と位置づけ、2030年に電源の20~22%という既存の目標値の達成を目指すとされています。一方、再生可能エネルギーについては「有望かつ多様で、長期を展望した環境負荷の低減を見据えつつ活用していく重要な低炭素の国産エネルギー源」としつつも、2016年度ですでに約15%になっているにもかかわらず、目標値22~24%を据え置き、世界から取り残される懸念が生じています。

目標値を見直さないのは、原発という不人気政策で世論を刺激したくないという政権の思惑があります。議論を行った審議会の初回で、世耕経済産業大臣は「(現行)計画の骨格を変える段階ではない」とあいさつを行っていました。

そこで、発電コストがどうなっているかの検討も行われませんでした。基本計画の基本方針では、安全性、安定供給、環境への適合と並んで、当然、経済効率性の向上が挙げられているのですが、3年前の試算を見直さなかったのです。

3年前に行われた試算では、原発の電気は1 kWhあたり10.1~円、一方、水力は11.0円、LNG火力は13.7円、風力21.6円、太陽光29.4円などとされ、原発が一番安いとされていました。この値は2014年に運転開始をするというモデルプラントを想定して、様々な仮定を置いて算出した机上の数字です。原子力資料情報室が、同じ方法で2016年における発電コストを計算したところ、原子力10.54円~、石炭火力11.35円、LNG火力8.58円となり、福島事故の補償費が膨らんだ場合の原発は11.98円以上、事故発生頻度を過去実績に即して計算した場合には12.26~15.14円/kWh以上になると、この3月に声明を出しています。原発が一番安いというこれまでの宣伝が崩れるから国は見直しを行わなかったのでしょうか？

これらの試算は、前述のとおりその年に運転開始するモデルプラントの場合です。しかし、原発の場合、70%の稼働率で運転開始後40年稼働するという前提ですが、そのような高い稼働率はありえないでしょう。

それでは、**実際の発電コストはどうなっているのか？** 電力各社の有価証券報告書実績を見れば明らかと主張しているのは、大島堅一龍谷大学政策学部教授です。研究開発費や交付金といった政策コストや21.5兆円とされる福島事故のコストなども加味すると、**原発が13.1円、火力が9.9円、水力3.9円の順になる**とされています。

原発を再稼働して電気代を値下げできるのは、既存のプラントで建設費などが要らず、燃料費だけを比較すると火力のほうが高くつくからで、決して原発の電気が安いわけではありません。決して騙されないように！